

地図を使ったフィールドワーク教育実践(4)

— 風景写真から土地の情報を読む —

地理人 今和泉 隆行

法政大学キャリアデザイン学部 教授 梅崎 修

1. はじめに

本稿の目的は、フィールドワーク実習の方法を開発し、その実践を紹介することである。2014, 2015, 2016年度に行われた地図を使ったフィールドワーク教育実践に関しては、既に今和泉・梅崎（2016, 2017a, 2018）で紹介したが、本稿は2017年度に行われた、写真を使った新しいフィールドワーク教育実践の報告である。

これまでの地図を使ったフィールドワーク実習の目的やその特徴については今和泉・梅崎（2016, 2017a, 2018）でも記しているが、本稿から読み始める人も多いと思うので、繰り返しその目的を述べておきたい。以下の記述では、主に今和泉・梅崎（2018）の第1節を元にしていく。

まず確認すべきは、我々が紹介してきたフィールドワーク教育実践の目的は、地図の読み方などをノウハウの学習ではないことである。我々の教育実践の目的は、地図や写真を通して〈社会〉を考える/想像する方法を学ぶことである。

なお、フィールドワークに地図や写真を使うこと自体は新しい試みではない。社会学や経営学などの社会科学分野、および民俗学や文化人類学などの人文科学分野において地域を対象としたフィールドワークを行う時に地図の読み解きや撮影はよく使われる。例えば、地理学のフィールドワークでは、地図は必須の方法である。

ところが、フィールドワーク教育には、参与観察や現場密着の聞き取りが学

生たちの関心を集める傾向があり、事前の調査が疎かになるという教育上の課題があった。つまり、あまり準備をせずに調査地域に入ってしまう、地域の全体像が掴めていないので、結局、地域を<面>としてではなく、<点（取材先）>として理解してしまうのである。特に大学外の短期滞在型の地域調査では、このような準備不足ではインタビュー調査さえも未消化になる危険性がある。結局、インターネットで取材先を探し、取材先で聞き取りを行っても、それは取材者である学生と取材先を点と点で繋げただけであろう。実際のインタビューを<虫の目>とするならば、事前の地図や写真の読解は<鳥の目>で地域を俯瞰することである。局所と全体の二つの目から地域を見る訓練がフィールドワーク教育には必要である。

2014, 2015, 2016年に行われた地理ワークショップでは、地図という情報から様々な人々の生活や仕事（キャリア）を想像することで、「地理的想像力」の拡張を意図していた（今和泉・梅崎 2016, 2017a, 2018）。続けて本稿で紹介する2017年の実習は、地図の読解から一歩進み、写真の中の風景から地域情報を入手する教室内ワークショップである。このワークショップは、実際に調査地域に行くのではなく、写真の風景から様々な情報を入手する力を学ぶことを目的としている。

風景写真を使う理由は、フィールドワークの三つの要素と言える「あるく・みる・きく」のうち、あえて「みる」以外の方法（あるく・きく）を塞ぐことで、「みる」ことの価値を理解してもらい、意識的に「みる」能力を鍛えるためである。一般的に地域フィールドワークに参加した学生たちは、風景を見ているが、「風景を読み解けている」わけではない。それゆえ、このようなワークショップによって「みる」力を学ぶことは有効であると考えられる。

ところで、インタビュー調査では事前に質問項目を作成するが、この事前の質問づくりは、対象に対する思い込みを強める危険性もある。つまり、インタビューにおいて、「問い - 答え」が事前に想定されるので、どうしても問題意識や社会課題に対する意識が先行しやすいのである。結果的に地域を歩き、観察しながら、土地の特徴を掴んでいくという作業が蔑ろにされてしまうかもしれない。風景が情報源であるならば、その風景を読み解きつつ、続けてインタビュー調査に進む方がよいと考えられる。

このような風景を読むことに関しては、今和泉・梅崎（2017b）で指摘したように、宮本常一が撮影した写真群という文化的遺産がある。宮本（2001）などを読めばわかるように、民俗学者である宮本常一は、聞き書きとともに写真を撮ること、さらに写真（＝風景）を読み解くことを重視していたことがわかる。そして、風景を読むための調査経験、民俗・歴史の知識、および能力（民俗学的知性）を身に付けていたと言えよう。宮本常一から直接教えを受けた香月洋一郎氏の著作によれば、宮本が彼の教え子にどのように風景を読む力を教えていたかを理解することができる（香月2013）。本稿の試みは、宮本（2001）や香月（2013）から大きな影響を受けている。また、今和泉・梅崎（2017b）で紹介した地図フィールドツアーは、調査地域には行くが、あえて「きく」ことを禁止し、「あるく・みる」だけでどれだけ情報が入手できるかを確認する実習と言える。この実習の試みと比較すると、本稿で紹介する実習は、参加者が「みる」だけに特化したフィールドワーク教育実践と言えよう。

フィールドワーク教育に携わる研究者の中には、写真を使い、風景を読み解く実習を行いたい人も多いと思うが、実際にどのように実施すればよいかはわからないかもしれない。このワークショップの試行が、フィールドワーク教育の授業改善に取り組む人たちにとって役に立てばうれしい。

2. ワークショップの概要

これまで今和泉は、梅崎ゼミにて地図を見てその場所の様子や背景を考えてもらうワークショップを実施してきた（今和泉・梅崎2016, 2017a, 2018）。たとえば、どこが大きな都市でどこから人を集め、商業や交通の拠点がどこにあるか、ということ地図から読み解いていった。また、同じくらいの規模で同一拠点数を持つ街でも、いくつかの街を比較するとその違い（街の個性）が現れることを確認してきた。

しかし、どこかの地域をクローズアップする鍵となるのは地図だけではない。風景（見る）、史料（読む）、およびインタビュー（聴く）も重要である。本稿では、風景を読み解き、地域の個性を把握していくフィールドワークの流れを整理した。まず、一般的には、地域フィールドワークを実施する時には、図1のような流れで行われるであろう。はじめに、調査地域に行く前に事前に

地図を読み、解釈や想像を交えながら地域の全体を分析する。次に、調査地域の写真を見たり、実際に歩きながら風景に目を向けたりする。最後に、インタビューや史料から地域の情報を読み解く。

1 地図 ▶▶▶▶▶ 2 実際の風景 ▶▶▶▶▶ 3 記事、史料、インタビュー

地域の全体像を把握するために有効。2や3のような詳細なディテールは読めないが、それらの位置関係や因果関係ををひと目で見渡せる、いわば2と3のビジュアルな目次でもある。2や3ほどの深読みはできないが、大方のあたりをつける「浅読み」はできる。

1をよりズームアップしたもので、詳細なディテールを確認するのに有効。視野に入る風景や風景写真は、街の中の一部を切り取ったものだが、その中にも道路や建物、植物等複数の要素が重なっている。同じ場所にある他のものとの重なり、他の地域との差異から深読みすることができる。

どこかで起こった具体的な事象やストーリー。1や2をズームアップしたものとも言えるが、ストーリーを追っていくと、時代や地域を横断することも多い。1、2は同地域、同時代の瞬間を切り取ったものだが、3はそれとは異なる切り取り方だ。1や2と組み合わせることで立体的に事象を読み解ける。

図1 フィールド調査の流れ

地図(1)を使うワークショップはこれまでも実践している。史料やインタビュー(3)についてはゼミでも授業でも習得する機会が多い。そのかわり、風景(2)を深読みする機会は少ないと言えよう。地図からは、建物の特徴や詳細な風景、実際の人々の様子や息遣いまでは読み解くことができない。地図では必ず示される数千、数万分の1という縮尺が示すように、大きく縮小されることで、細部はかなり省略される。地図を深読みすることで見えることもあるが、実際現地に行かないと分からないことも多い。地図が鳥の目だとすると、実際に行ってみて見えてくる風景は虫の目と言えよう。虫の目と鳥の目の両者があってこそ、見たいものはよく見えてくるのである。

しかし、ゼミの時間中でフィールドワークするには時間的、地理的制約がある。大学付近の街に限られ、複数の異なる風景を比べて見ることも難しい。そこで、実際にフィールドワークに行く代わりに、複数の異なる場所の風景写真を見比べて深読みするワークショップを企画した。続けて、この内容を説明したい。

まず、ワークショップの進行上、深読みするポイントを絞った方が良いため、今回はいつ市街化(宅地化)したかについての時系列順に絞った。住宅地、小さな市街地、大きな市街地の3つの分類で、それぞれ異なる場所の5枚の写真を用意し、できたのが古い順に並べ、その理由を考察してもらうこととした。4~5人で1グループを作ってグループワークで実施した。その3つの

課題は以下の通りである。また、これは正解に至ることが重要ではなく、何に着目したか、そこからどんなことに気づき、何を推測、考察したかといった部分が重要である。そこで、グループワークの発表の都度、この点を聞きかえし、考えてもらうようにした。

課題1…住宅地：5枚の写真を宅地化されたのが古い順に並べ、古い街の特徴と新しい街の特徴を見つける（写真1～5、考察10分、発表10分）

課題2…小さな市街地：5枚の写真を市街化したのが古い順に並べ、古い街の特徴と新しい街の特徴を見つける（写真6～10、考察10分、発表10分）

課題3…大きな市街地：5枚の写真の街の違いを考え、自分が出店するならどこかを選ぶ（写真11～15、考察10分、発表10分）

3. ワークショップの課題と解釈

続けて、一つ一つの課題の内容を紹介する。はじめに具体的な風景写真を紹介し、その上で、それぞれの風景写真に対して今和泉が参加学生たちに行った解説を紹介する。

(1) 課題1…住宅地



写真1



写真2



写真3



写真4



写真5

課題1で使う写真1～5を見ると、一見、建物が古いかどうかでその地域の古さを判断しそうになるが、その判断は正しい時もあればそうでない時もある。

写真3、4の建物を見ると新しい建物が多く、新しい住宅地のように見える。確かに、新しくできた街や住宅地には古い建物はないので、この点は正しい。しかし、古い街には古い建物しかないかというと、建物は建て替えられるため、建物だけで判断はできない。

一方、写真1は、木造で古そうな建物であるが、手入れがされていてかなり状態は良いと言える。これは古い建物を手入れしているのか、建て替えて以前と同様の建物を新しく建てているのかは分からない。しかし、ここが古くからある街でその景観を保全しようという意図は、建物の持ち主のものか、周辺住民を巻き込んだ地域全体のものか、どちらかは分からないが、少なからずその意図を読み解くことはできる。このような点を考慮すると、かなり古くからの歴史的な街であるだけでなく、そのことが周辺で知られていることが読み解ける。写真1に比べると写真3に写っている建物は一見新しそうに見えるが、実は築年数はそう変わらない可能性がある。写真3に写っている建物もかなり築年数は古いのである。いわゆる日本的な、歴史的な街としての景観保全の意識

はないが、昭和戦前から高度成長期までに形成された昭和レトロの雰囲気は漂っていると言えよう。

写真1と3でもう1点注目したいのが、道路の幅と、道路と建物の距離、そして駐車スペースである。車が写っていないので分かりにくいですが、車で通るには少々狭い道幅で、道路に面してすぐに建物が建っており、駐車場がないのである。高度成長期以前は自家用車保有率が低く、道路は車での通行を前提としておらず、家にも駐車場は作られていないのが普通であった。そのような特徴が、その他の写真と比較すると「違い」として見えてくる。写真2、4には車が写っており、5の写真は車こそ写っていないものの、家に面した車庫があるのが見て取れる。

加えて、道路の形状にも注目すべきであり、写真3、5の道は少し道が曲がっている。これが古さを意味する可能性は高い。直線的な道路網は、その区画が計画的に作られたことを物語っている。ただし、そうかといって計画的に作られたところが新しいとは限らないことは注意すべきであろう。京都は、日本で最も有名な古都であり、その長い歴史は広く知られているが、計画都市で、道路網は基盤の目である。その他、城下町の多くも江戸時代の計画都市である。道の形状だけで新旧は読み解けないが、なぜ直線的か、なぜ曲がっているかを考えると地域の歴史を読み解く鍵が見えてくると言えよう。

さらに考察を加えると、写真1は、古い計画都市だとして、他に直線的な道が見えるのは写真2と4である。特に写真2は新しい建物が多だけでなく、畑も見える。ここは、以前は農地が広がっていたのが、宅地にするため区画整理を行い、少しずつ新しい住宅が建設されているところであると言えよう。つまり、農地が減り、住宅が増えてくる可能性が読み解ける。写真4は農地が少ないものの、建物のない敷地（駐車場、空き地）は少々ある。ここも以前は農地だったのが、区画整理され、建物が建てられ少しずつ宅地化してきたところであろう。

一方、写真5は、その流れと少々異なる。むしろ、樹木も多く、少し田舎っぽくもある。ここは農地があっただけでなく、農家も存在するかもしれない。写真右側の森は、自然林や寺社である可能性もあるが、農家の周囲を覆う森（屋敷森）である可能性もある。もしここが農家だとすると、その農家は古く

からあることが予想される。しかし、写真左の住宅がいつ頃作られたかがポイントで、それが現在の住宅地の様相を形作っているとも言える。築年数は2、4ほど新しくないが、駐車場はある。つまり、高度成長とともに、都市郊外の農地が急速に宅地化していった地域と考えられるのである。

そこから読み解ける答えは、古い順にまとめると、写真1、3、5、4、2となる。1～5の写真が撮影された地域は以下の通りである。

写真1…京都市上京区横大宮町（中筋通大宮西入ル）※江戸時代に市街化

写真2…千葉県流山市十太夫 ※2000年以降に市街化

写真3…静岡県下田市一丁目 ※江戸時代に市街化

写真4…栃木県鹿沼市東末広町 ※1970年以降に市街化

写真5…千葉県松戸市下矢切 ※1960年以降に宅地化

(2) 課題2…小さな市街地



写真6



写真7



写真8



写真9



写真10

続いて、6～10の写真は、住宅地ではなく中小の商店が集中する小さな街の
写真である。さきほどの観点で言うと、道路と建物の間は詰まっているが、市

街地に関しては建物を密集して建てるため、駐車場が作られないこともある。

一方、写真1のように、建物の1階が車庫として転用されている例も見られる。写真1は街なのかどうか分からないが、もともと商店街だったところである。建物の1階と2階の間には、外壁とは異なる無地のプレートが貼り付けられているが、これは商店の看板であろう。つまり、商店街だったが商店が撤退したところであると読み取れる。車庫になっている場所ももともと商店だったところであろう。写真左を見るとカフェが営業中で、ここでは貴重な営業中の店舗である。空き店舗だったところに新規開店したのではないと思われる。一旦衰退した商店街には、こうしたリノベーションや再出店の動きが見られることがある。

写真7は、建物の築年数も道幅も写真6とあまり変わらないが、こちらは魚屋や喫茶店が営業中である。実は、種明かしをすると写真6と写真7は同じ街である。おそらく何かしらの理由で写真6の通りは衰退し、写真7の通りは現在も営業中だと思われる。写真6の通りも以前は写真7の通りのような雰囲気だったと解釈できる。

写真8は、個人店だけでなく、すき家、ロッテリアといったチェーン店もある。中小地方都市の市街地では、写真6、7のように個人店だけになるが、大都市や大都市郊外では、写真8のようにチェーン店と個人店が混在する。ファストフード店があるということは駅前等の中心地であるとも考えられるが、建物自体は低層なので都市郊外と予測できる。都市郊外は、さきほどの写真5と同様に高度成長とともに都市化した街が多い。

続いて、写真9は建物が古く、1の写真と同様、歴史的な街である。景観の価値が周辺にも知られ、それを保全する動きが感じられる。もう一点、古い街であることを感じさせるのは、写真左に写る呉服店である。呉服店は新規開業することが少なく、着物が婚礼で欠かせないもので財産にもなった時代に繁盛した業態である。特に呉服店が多い地域は、江戸時代から人が多く住んでいたこと、その住民の財力が大きかったことも読み解ける。古くから繁盛する街にある重要な業態は、呉服店の他にも、旅館、和菓子店等がある。

一方、様相が全く異なるのが写真10である。ひとつ一つの建物が大きく、ほとんどがチェーン店で、奥にはタワーマンションもあり、地域全体が新しく作

られた様相である。高度成長が終わって以降に新しく街が作られる場合、このような街の景観が生まれることが多い。ここから確たる正解を導くことはできないが、古さの順序は、写真9、6・7、8、10（6と7が同列）だろう。写真6と7は同じ街だが、写真9の街とどちらが古いかは正確な情報がないので分からない。しかし、8と10が後の年代にできたことは明らかである。

写真6…静岡県下田市一丁目 ※江戸時代に市街化

写真7…静岡県下田市一丁目 ※江戸時代に市街化

写真8…東京都町田市玉川学園 ※1940年以降に市街化

写真9…鳥取県倉吉市魚町 ※江戸時代に市街化

写真10…東京都荒川区南千住四丁目 ※2000年以降に市街化

(3) 課題3…大きな市街地



写真11



写真12



写真13



写真14



写真15

最後の課題3は、比較的大きな街を写した写真11～15を見て比較した。最後は、街ができた順番ではなく、「もしお店を開業するなら、どのようなお店で、

どかがよいか」という問いを参加者に投げかけた。

この中で街ができた順番を言えば、多くが江戸時代からの街であることがわかる。写真11は、石川県金沢市の中心市街地の片町、写真12、13は栃木県宇都宮市の中心市街地、いずれも江戸時代以前からある城下町である。写真14、15は東京都新宿区である。江戸時代は甲州街道の宿場町、内藤新宿があったところである。当時は小規模な町だったが、明治以降、東京の一つの中心地として日本を代表する街になっていった。グループワークの開始当初は、このような情報は提供せず、情報源を街の風景写真だけに限って、開店するならどこが良いかを考えてもらった。写真からこの街にはどんな人が来るか、周辺にはどんな店があるのか、といったことを写真の風景から読み取ってもらうのが狙いである。

写真11は、古くからの個人店、特に夜に賑わいそうな飲食店が多いと推測できる。小さな路地に入ったところは、多くの通行人を一挙に集める店よりも、常連客の割合が多い小規模な店が多いであろう。一方、写真12を見ると、飲食店だけでなく他の業態の店舗やオフィスもあり、よく見えないが小規模な個人店もあればチェーン店もありそうな雰囲気である。例えば、カフェを開業すると想定した場合、写真11の場所と写真12の場所では、その客層、雰囲気、店内のコミュニケーションは変わってくると想像できる。

ところで、一概に写真11の場所でお店を始めると高齢の酒飲みが多いという話でもない。こうした路地の雑踏を好む若年層もおり、むしろ少シクローズドで、店主とお客の距離が近い店が流行るかもしれない。写真12の場所では、お店が多くの人目に触れ、幅広い層が来る代わりに、店主とお客の距離は離れるであろう。

また、写真13に写っているのはほとんどがオフィスビルなので、平日の昼12～13時はランチと弁当販売で賑わい、夜は飲み会で賑わうのがよくあるパターンであると推察される。客層と賑わう時間が読めるので、売上は読みやすいと考えられる。一方、写真14は、小さな路地の個人店はあるが、周辺はビルに囲まれているので、大きな街であることがわかる。街への来訪者も多く、勤め人も多いと考えられるので、写真11～13と同様の要素も兼ね備えている。写真15は、表通りだが、飲食店だけでなく各種物販店が軒を連ね、ビルの上層階まで

店舗が入っていることが確認できる。この街が多くの人を集めている証拠である。写真14、15は、これだけの好条件を兼ね備えていれば、地価はとても高いと予測できる。もちろん、新宿であるとわかれば、写真からの読みを経ずに地価の高さもわかってしまうが、写真からそれを読み解けるかどうかを促した。そして、これだけの賃料を払って開業できるかどうかは、経営上の判断が必要であると発言し、参加学生の新しい発想を促した。

なお、このワークショップに「正解」はないと言える。今和泉による深読みも正解とは限らない。参加者たちには、たった一つの正確を探すのではなく、それぞれの解釈の多様性を楽しんでもらうことを促した。三つの課題は、写真に写っている建物や人々を知識として理解するのではなく、地域の歴史や特性を推測し、歴史背景を読み解き、人々の生活を想像し、他の場所と比較するきっかけになればよいのである。ちなみに写真の撮影場所は以下の通りである。

写真11…石川県金沢市片町一丁目

写真12…栃木県宇都宮市池上町

写真13…栃木県宇都宮市本町

写真14…東京都新宿区新宿三丁目

写真15…東京都新宿区新宿三丁目

(4) 新旧を読み解くポイント

最後に、風景写真から土地の新旧を読み解くポイントを図2のようにまとめることができる。この図が示すように、風景写真の中には、様々な情報を埋め込まれているので、道幅ならば道幅だけで新旧を決めることはできない。風景の中から複合的に判断できる想像力や分析力が求められると言えよう。

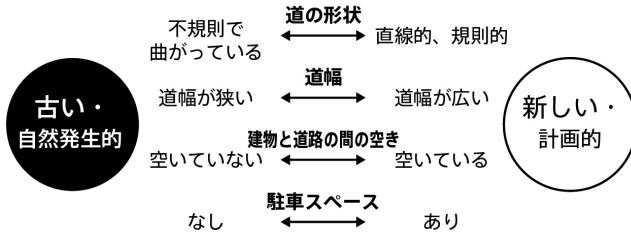


図2 新旧を読み解くポイント

4. 参加者（学生）の感想

本節では、授業後に得られた参加学生の感想を紹介する。いずれも「地図から現状を読み解く」ことが可能だという気づきや、今後、地図や実地の様子から、その地域の様子を多面的に見てみたい、という想像力の喚起が生まれていた。感想は大きく分けて三種類にまとめることができる。

(1) 道路や区画の広さに関する気付き

- ・写真の見た目だけで古い、新しいを判断するだけでなく、その町にどのような歴史があったのかを考えることが大切ということ学びました。普段風景を見ていて建物に目を向けがちでしたが、道にも町のことが関係していることがわかりました。
- ・建物だけで土地の新しさを判断するのではなく、道路の区画や狭さ広さから判断できることを学んだ。
- ・道がまっすぐかまっすぐでないかでその街の古さが分かる可能性があるという情報が聞けてすごく刺激的だった。
- ・道の特徴（広さ、形、重なり具合）だけである程度の時代やその背景が分かってしまうことに衝撃を受けた。
- ・今までは、道路の形でその街の古さを推測したことがなかったので、今回のワークは興味深いものでした。
- ・写真から時代を推測できるというのがすごいと思いました。道が曲がっていたり、木造だったり、一見きれいな街並みでもきれいな街並みでも古い街だというのが興味深かったです。

(2) 風景の深読みに関する気付き

- ・一つの写真がもつ情報の量が無限にあるんじゃないかと思うくらいいろいろな情報が読み取れて、自分自身もびっくりした。
- ・普段何気なく過ごしている街並でも、写真一枚におさめて歴史や時代を考えると、わからないことだらけだと気付かされました。普段からただぼーっと歩くだけでなく、風景の裏側に気づけるような鋭い観察力をみつけていきたいです。
- ・普段何も考えずに通っている道たちを、過去、今へと写真を切り取っていくことで、あんなに想像が広がるのだと思いました。視野を広げるきっかけになったと思うし、ワークは何気ない日常写真なのに、いろいろな意見をきくことで見方少し分かった気がしました。
- ・街並みを見てどれが古くてどれが新しいか、というのは、ただ見たイメージでの「古い」「新しい」ではなく、建物の造りや道路によって判断するなど自分にとっては新しい発見だった。また、自分が住んでいる土地の歴史も知りたいと思った。

(3) 見るポイントや捉え方が人によって多様だという気付き

- ・自分の目先と他人の目先は全然違って、それぞれ同じ建物を見ていても、見ているポイントが様々でびっくりした。
- ・クイズのような感覚で楽しかった。しかし全てに「なぜ」という疑問を投げられ、自分の考えが足りてないことが分かった。
- ・自分が「この写真はこの年代だろう」と思った写真でもグループのメンバーに聞くと「これがあるからこの写真はこの年代だね」と自分が気づかなくて他の人が気づく面白さはあった。
- ・写真を見るとどうしても“見た感じ”が古い、新しいという判断をしますが、先輩たちが道の広さ、曲がり方などから考えている姿を見て“見た感じ”だけではないまちの見方を知りました。特に印象的だったのが屋根のかたち、何階建てが多い、家の並び方や作られ方にも着目していたところでした。
- ・人によって同じ写真でも見方が違って面白かった。きれいな建物だから

とって、その土地、地域が新しいとは限らない。要するに見ただけでその地域を理解してはいけないと思った。

- ・どのグループも同じ答えがなく、人の見方によって考え方が何通りもあるのだなと思った。
- ・同じ写真を使っても、グループによって年代の判断が違ったり、判断基準がバラバラで、面白かった。建物の違い、道幅の違いなどで判断がつく新しいまちの見方を知ることができた。

5. まとめ

今回の風景写真から土地の情報を読み解くワークショップは、フィールドワーク教育として学生の想像力を刺激できたのではないかと考えている。前節の学生の感想からの短期的にも教育効果が確認できるが、その時の2年生は、その後、1月に武蔵小山と大井町、3月には藤沢、8月には秋田、10月に松戸などでフィールド調査を重ねているので、その際にもこの時に経験が生かされていると言える。ただし、学習の個人差は大きく。新しい街の風景を見ても気づく学生と気づかない学生はわかる。教員による気づきへの継続的な促しが求められると言えよう。

実際、特に深読みができていたグループがいくつかあったが、その深読みは4年生によるものだった。グループ自体は、2年生から4年生が混在するメンバー構成だったが、深読みできていたグループには、深読みできる4年生がいたのである。彼ら彼女らは、いくつかの街にフィールドワークに行った経験の中で深読みの能力が醸成されたきたと考えられる。もちろん、新しい視点や想像が刺激になったと言う2、3年生も多かった。我々は、講師から学生に知識を移転するだけでなく、ワークショップや実際のフィールドワークの中で学生同士での視点や知識、想像力の共有ができればよい。また、今後もこうしたワークショップを検討したいと考えている。なお、潜在的な能力を発揮できる機会、その経験をできるだけ言語化し共有する仕組みについては、今後の課題としたい。

[参考文献]

- 今和泉隆行・梅崎修 (2016) 「地図を使ったフィールドワーク教育実践 (1) - 想像地図散歩ワークショップ」『法政大学キャリアデザイン学部紀要』第13号 pp.143-156
- ・梅崎修 (2017a) 「地図を使ったフィールドワーク教育実践 (2) - 空想地図づくりのワークショップ」『法政大学キャリアデザイン学部紀要』第14号pp.201-226
- ・梅崎修 (2017b) 「地図フィールドツアーの実施報告 (1) : 「流山おおたかの森」から「柏」へ」『生涯学習とキャリアデザイン』15 (1), 193-200
- ・梅崎修 (2018) 「地図を使ったフィールドワーク教育実践 (3) - 空想地図上の街・中村市を読む-」『法政大学キャリアデザイン学部紀要』第15号pp. 279-296
- 香月洋一郎 (2013) 『景観写真論ノート: 宮本常一のアルバムから』筑摩書房
- 宮本常一 (2001) 『空からの民俗学』岩波現代文庫

ABSTRACT

Report of Fieldwork Education Using Maps (4)

– A Landscape Photography Workshop

Takayuki IMAIZUMI
Osamu UMEZAKI

This paper introduces our fourth workshop on fieldwork, following three workshops conducted by Imaizumi & Umezaki (2016, 2017, and 2018). This workshop focuses on the usage of cartography and photography; in fact, using maps and photographs for fieldwork is not a new approach. However, the use of maps or photographs that students have not investigated sufficiently is problematic as they are only interested in participant observation and interview methods. In brief, students enter the field without having done much preparation, thus making it difficult for them to understand the essence of fieldwork. Therefore, we designed a workshop using landscape photographs in order to build a strong “geographical imagination” and examined the resulting effects.